

浄土真宗入門

— 親鸞の教え

Ikeda Yūtarō
池田勇諦



真宗新書

あなたは本当に浄土真宗の
門に入っていますか？

浄土とは、念仏とは、往生とは…。
わからなかったことばが鮮明に輝きだす。

京都・東本願寺出版 発行



真宗新書

浄土真宗入門
— 親鸞の教え

池田勇諦

Ikedda Yūteki

浄土真宗入門 — 親鸞の教え

もくじ

序章 「入門」を問う…………… 11

わかつていたはずの人生がわからなくなる、
この歩みこそ真宗入門の歩みでありましょう。…………… 12

第1章 「浄土」とは…………… 21

浄土とは、私たちを離れて、

どこかに思い描かれるような世界ではない。…………… 22

地獄も浄土も「造ったからある」。

造らなければないのです。…………… 29

「死んだらどうなるのか」と

問わずにいられない私たち。…………… 36

第2章 「往生」とは…………… 45

自分にとって「浄土に生まれる」とは

いかなる体験なのか？……………46

「往生の生活」とは

どのような歩みなのか？……………53

第3章

「本願」とは……………61

真宗仏教の「救い」は

「本願」にもとづく救いである。……………62

自分のことでありながら、

自分でわからない。はてさて？……………69

第4章

「他力」とは……………79

「他力がわからん」とは、

自力がわからんということ。……………80

「他力」の「他」とは、

「自力の心」の他なのです。……………88

第5章 「念仏」とは…… 97

「南無阿弥陀仏」は

言葉となった仏です。…… 98

「念仏は、声に出さなきゃ

ならんものなんですか？」…… 106

第6章 「信心」とは…… 115

「信じる」とは

どんな出来ごとだろっか？…… 116

私たちにとって、

「回心」とはどんな体験か？…… 124

第7章 「聞法」とは…… 131

「法を聞く」とは…… 131

第8章

どのような歩みなのか?……………132
なにを聞くのか、なぜ聞くのか、
どう聞くのか?……………140

「回向」とは……………149

他者との絆が問われるいま

「回向」の意味をあらためて考える。……………150

なぜ往相と還相の

二種回向が説かれるのか?……………158

第9章

「諸仏」とは……………167

「諸仏」のひと言にこめられた、

私たちの人生の一大事。……………168

阿弥陀仏と諸仏と私たちは

どういう関係にあるのか?……………176

第10章 「生活」とは……………185

真宗の教えと「生活」は

どのような関係にあるのか?……………186

真宗の教えを生きるとは

どのような生活なのか?……………194

第11章 「教化」とは……………203

教化という課題は、

私たちにとってどういうものか?……………204

「自信教人信」とは

いったいどういうことなのか?……………211

あとがき………
219

序章 「入門」を問う

わかつていたはずの人生がわからなくなる、
この歩みこそ真宗しんしゅう入門の歩みでありましょう。

「入門」は名詞ではなく、動詞である

今回「真宗入門」という課題をいただきましたが、はじめに「真宗入門」という課題そのものについて、これをどう受けとめるのか、その点を自問したのであります。と言いますのは、私は、「真宗入門」は「真宗入門とは何か」を問うことから始めなければならないと考えるからです。

実は、時々「真宗入門」というテーマをいただいてお話を依頼されることがあるのですが、そんなとき私は、どんなお話を望んでおられるのかを必ずお尋ねするのであります。すると、「真宗の教えを初めて聞くような人たちに集まってもらいま

ですので、極めて初歩的なところを話していただきたいと思います。……などとおっしゃいます。

確かに一般的には「○○入門」と言えば、一つの領域の入り口のところを取りあげる初心者向きの話ということになるようです。そうしますと「入門」は「概論」とか、「特殊講義」とかと区別する意味での分類概念であり、名詞なのでしよう。

しかし私は「真宗入門」と承ると、何よりも『歎異抄』の序文が告げる「幸いに有縁の知識に依らずは、いかでか易行の一門に入ることをえんや」（よき師に出遇うことがなければ、易行の一門に入ることはできないだろう）という言葉を想起するのです。ここに「易行の一門に入る」とありますが、それは法然上人・親鸞聖人の「ただ念仏して」（専修念仏）の一門に入ることでしょう。ならば焦点は門に「入る」ということです。

「入る」ということで言えば、親鸞聖人が七高僧の一人と讃えられた龍樹菩薩りゆうじゆぼさつ（一五〇〜二五〇頃）は、「入にゅう」は、正ただしく道どうを行ぎようずるがゆえに、名なづけて「入にゅう」とす」（『教行信証』行巻）と言われています。そうすると、「ただ念仏して」の一門に入るということは、念仏の道を正しく行じる、つまり念仏が自分の生きることと一つにならなければならないのでしよう。

そこから言いますと、「入」とは、「選せんび」とその「反復」を内容としています。つまり「ただ念仏して」に生きる者となるという最初の選せんび・決断と、そこに始まる選せんびの「反復」という歩みです。

「反復」というのは、私たちの生活の場は、つねに問題と出会って苦しんだり悩んだりの繰り返しですね。その現実から「ただ念仏して」の決断の初心が幾度となく確かめ直されていくことでしょう。その意味で「真宗入門」は実践概念であり動詞です。

「答え」は「問い」の中にしかない

これはたまたまラジオで聞いた、アニメ映画で著名な宮崎駿^{はやお}監督の発言です。「現代のあらゆる領域における行き詰まり状況は、戦後日本人が万事について『どうしたらよいか』という対症療法的発想でやってきたことのツケではないだろうか。それに対して、鎌倉期に出現した法然・親鸞という人は『なぜか』という根本的思考を生きた人ではなかったか。この発想こそ現代のわれわれが学ばねばならぬ一点ではなかるうか」。私の記憶では、おおむねこんなことをおっしゃっていました。

かつて、「テロなくすための戦争、テロを生み」という川柳がありました。それはまさに、対症療法的な発想では報復の連鎖を断ち切ることはできないことを語っています。

作家の故・遠藤周作さんが、「本当の宗教というのは、神も仏もないのかと思つたところから出発するものじゃないか（中略）私に子供がいて、それが癌にかかったとすると「神様、お願いします、助けてください」と、親だから当然祈ります。にもかかわらず死んでしまったら、奇跡も何もないじゃないか、神も仏もないじゃないかと思うでしょう。でも、そういうところから本当に宗教が始まるのではないでしょうか」（『神と私―人生の真実を求めて―』海竜社）ということを書かれていました。

これを私があるところでお話ししましたら、ある人が「本当に宗教が始まるのは、何が始まるのですか」と言われ、あらためて考えさせられました。私たちは宗教についても対症的な発想しかないのです。そこには次から次へと「答え」を追いかける姿勢しかありません。しかし、「答え」は「問い」の中にしかないのです。「神も仏もないじゃないか」と崩れ落ちたその事実の中にしか、見

出すべき真実はないのです。その意味で「問い」がすべてなのです。だから私は、仏法には玄関も奥座敷もないと申したい。

わかってしまっている私たち

私たちは教えによって、「問い」そのものの意味を聞思もんししていくことが求められています。それだけに「真宗入門」とは、自分の考えの延長線上で真宗がわかるようになることではなく、むしろ自分の思考・分別ぶんべつが問い返されていく学びとして真宗の教えが迫ってくることでないでしょうか。

日ごろ「仏法がわからん」という溜め息のような発言によく接します。誰もに通る道ですが、それについても忘れられないことがあります。

以前、お寺の集いで、清沢満之師*2（一八六三〜一九〇三）の絶筆『我が信念』を読んでいたときのことです。「私は何が善だやら、何が悪だやら、（中略）何が幸福

だやら、何が不幸だやら、何も知り分くる能力のない私……」という文章のところ
ろで、ある人が「清沢先生ですらわからんと言われているのやから、私たちがわ
かるはずがないですよね」と発言されたので、思わず大笑いになったのです。

それはなぜか。まったく逆だからです。清沢先生だから、わからんとおっ
しやった。私たちはわかっているのですね。健康であることは幸福、病気は不
幸。お金があることは幸福、貧乏は不幸……。みんなわかっているから、仏法に相
談する必要がないのです。

健康であっても暗い顔もあれば、病気であっても明るい顔もある……。何が幸福
なのか、何が不幸なのか、何が善なのか、何が悪なのか、わからなくなる。わ
かっていたはずの人生がわからなくなる、この歩みこそ真宗入門の歩みでありま
しょう。

わからんことになって、わかる真宗。わかっているから、わからん真宗。妙で

すね。

*1

龍樹：初期大乘仏教を確立した古代インドの論師。

*2

清沢満之：明治期に活躍し、近代教学の確立に尽力した真宗大谷派の学僧。

